

神通川の中下流域の河川形状はどのように変化したのか

研究分野 漁場の環境を守る

ねらい

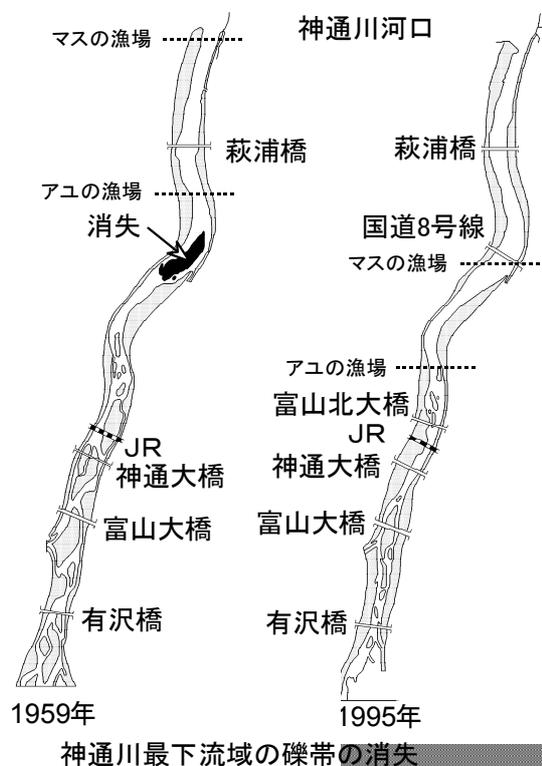
- 近年の河川環境、特に河川形状は魚類の生息には悪い方向に変化し、漁業に大きな影響を与えてきたと推察されています。しかし、水産の立場からみた河川形状の変化を具体的なデータで示した例はほとんどありません。
- このため、本研究では河川管理者に魚に棲みよい河川形状を理解してもらうために、長らく河川漁業が存続してきた神通川において、中下流域周辺における河川形状の長期的な変化を明らかにしました。

成果

- 明治時代の神通川は河口から6～10km付近で東側に大きく屈曲していましたが、1901年からの^{はすこし}馳越線工事により直線化され、直線距離にして約1.4km短くなりました。また、1970年代以降、低水護岸の建設が進み、右岸側の多くがコンクリートや矢板で固められ、流路の固定化、流路幅の縮小、流路の直線化が進みました。このことにより、大きな淵が消失しました。
- 1965年までは豊富に見られた中州（礫河原）は1969年以降は縮小する傾向が認められるようになり、特に最下流域に位置する中州ではその傾向が顕著でした。1984年には河口から3.2km付近にあった中州は完全に消失し、最下流に位置する中州は河口から5.9kmに後退しました。これらの川砂利域の喪失は、ダム構築による砂利や土砂の流下の阻害および砂利採取や土砂採取などの河川工事に起因したものと考えられました。現在のサクラマスやアユの漁場の下限は、1960年代に比べて約3km上流に後退しました。
- 神通川中下流域における近年の河川形状の長期的な変化は、富岩運河へのアユ稚魚などの迷入、取水施設へのアユ仔魚の連行、サクラマスとアユの漁場の縮小、アユの産卵場の喪失および稚魚・幼魚などの出水時の避難場所の喪失など、河川漁業に大きな影響を与えてきたものと考えられました。

活用

国土交通省が主催する委員会や漁協が行う河川環境に関する勉強会・講習会などで本成果を発表してその改善策を提言し、河川環境の改善に役立ててもらっています。（詳しくは富山県水産試験場研究報告16号に掲載されています）



研究実施期間 平成15年度～平成16年度
問い合わせ先 水産試験場 (076-475-0036)